

# 方言をテーマにした本

八戸工業大学 基礎教育研究センター 准教授 岩崎真梨子

今回は方言をテーマにした本を、幅広いジャンルで選びました。児童書として親しまれている本や、若い人たちにも読みやすい漫画、読み応えのある専門書まで。八戸の方言が出てくる本もあります。方言は、ただ地域特有の言葉であるというだけでなく、その地域の歴史や文化と深い繋がりがああるということも分かります。ぜひ手に取ってみてください。



## バッテリー (全6巻)

あさの あつこ

野球の小説として親しまれている『バッテリー』の舞台は、岡山です。主人公の匠は引っ越してきて共通語を使いますが、弟の青波は岡山弁を使います。登場人物の言葉の違いが、それぞれの性格にも影響しています。既に読んだことがある人も、ぜひ登場人物たちの言葉に着目して読み返してみてください。



## 太陽の子

灰谷 健次郎

舞台は神戸ですが、沖縄と深い関わりのある作品です。主人公のふうちゃんは、沖縄料理のお店「てだのふあ・おきなわ亭」のひとり娘。お母さんと、病気のお父さんと暮らしています。ほとんどの登場人物が関西弁を使います。どうして沖縄の言葉が出てこないのか、読み進めると分かります。生き生きとして明るい関西弁の台詞と、物語の根底にある戦争という重いテーマが調和し、最後に小さな希望が灯ります。



## ユタと不思議な仲間たち

三浦 哲郎

主人公のユタ（勇太）は、東京から東北に引っ越してきた転校生。友達もできず、つまらない毎日を過ごしていました。けれど、座敷わらしのペドロたちと仲間になったことで、ユタの世界は大きく変化し、少しずつたくましく成長していきます。幼い頃に読んでいたので、ペドロたちの唱える呪文が方言に由来するということは知っていましたが、東北に来てから読むと改めてこみあげるものがありました。



## 沖縄で好きになった子が

方言すぎてツラすぎる (現在3巻まで刊行中)

空 えぐみ

インターネットでも一部が読める漫画です。沖縄に転校してきた僕（中村）には好きな人がいます。名前は喜屋武さん。でも彼女の言葉はウチナーグチ（沖縄の方言）で、僕にはちっとも分かりません。比嘉さんがヤマトグチ（共通語）に訳してくれるのでどうにか会話が成立します。ディープな沖縄の方言が漫画で読めます！



## じいさんばあさん若返る (現在3巻まで刊行中)

新挑 限

舞台はおそらく青森県の西のほう。主人公のじいさんばあさんは、りんご農家を営んでいます。孫もいる年齢の二人ですが、ひよんなことから青年と娘の姿に若返ります。津軽弁っぽい台詞が出てきますが読みやすく、ちょっと方言で癒されたいというときにお勧めです。じいさんとばあさんの素朴で愛情のあるやり取りに心が温まります。



## 全国アホ・バカ分布考

はるかなる言葉の旅路

松本 修

バラエティー番組が、アホとバカの境界の調査に乗り出したことから生み出された、傑作ノンフィクション。大阪出身の夫は、東京出身の妻に「バカ」と言われると深く傷ついていました。しかし、同じように妻は夫の「アホ」という言葉に傷ついていました。アホとバカの境界はどこに？ 夫婦の小さな依頼から、全国様々な「アホ」「バカ」の言い方が寄せられ、分布図になるまでを緻密に綴ります。東北もたくさん登場します。

# 「方言コスプレ」の時代

ニセ関西弁から龍馬語まで

田中 ゆかり



一般の方でも読みやすい専門書です。「方言を使ってはいけない、恥ずかしい」と言われていた時代から、関西人ではないのに「なんでやねん！」とつっこむスタイル（方言のコスプレ化）が確立する現代まで、新聞記事などの資料を使って分かりやすく説明しています。関西弁や広島弁は怖い？ 東北の方言は素朴？ 方言に対するイメージについても言及されています。



## 自閉症は津軽弁を話さない

自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く

## 自閉症は津軽弁を話さないリターンズ

コミュニケーションを育む情報の獲得・メカニズム

松本 敏治

私は教育に携わる仕事柄、発達障害の若者と関わる機会があります。そんななか、この本を見つけ、タイトルに心惹かれて読みました。読み進めていくと、自閉症の方（特に子ども）と方言の関係が次々と明らかになっていきます。著者の松本先生にお会いすると、とてもパワフルで楽しい方。本を読んでいると、松本先生の元気な声が聞こえてきそうです。



## 日本語アクセント入門

松森 晶子・新田 哲夫・木部 暢子・中井 幸比古（編著）

一口に日本語のアクセントといっても、地域ごとに違うということは誰もが自然と知っています。では、どう違うのでしょうか？ 本書では、特徴あるアクセントを持つ地域ごとに（東京や青森、京都、高知、鹿児島など広く詳しく！）、アクセントの解説をしています。アクセントってなんだろう、イントネーションってなんだろう、という興味や疑問に答えます。



## イサの氾濫

木村 友祐

南部地域の方言をまざまざと見せつけてくれる木村友祐氏の小説。主人公・将司は、40歳にして仕事を辞め、東京での生活に行き詰っていました。そんななか、夢に出てきた叔父のイサ（勇雄）のことを調べるために八戸に戻って来ます。イサには傷害罪の前科もあり、一族に迷惑をかけていますが、一方で、イサは必要な存在だと言う老人がいます。それはなぜなのか。イサこそが声を上げなければならない、叫べ。その意味を、ぜひ読んで確かめてみてください。



## 海村

梶谷 伸夫

まるごと全部、鮫の言葉。読んでいると方言が音になって聞こえてくるようです。物語からは、著者である梶谷伸夫氏の人柄や、鮫の土地柄が感じられます。海胆や鮑が姿を消して十何年とあるので、私が八戸に来た頃には既に海の姿は変わっていたのでしょうか。生きている浜、賑やかな浜を想像しながら、多くの人に読んでもらえたらと願います。



八戸工業大学 基礎教育研究センター 准教授

いわ さき まり こ  
岩崎 真梨子

八戸工業大学 基礎教育研究センターで国語を担当している岩崎です。  
2012年に岡山から八戸に来て、勤務9年目になります。  
初めて「ひと棚」で本を紹介させていただいたのは3年前。  
今ではすっかり八戸の気候や食べ物にも馴染みました。  
9年も住んでいるわりに友達は少ないですが、猫2匹と楽しく暮らしています。

2021年8月21日（土）

耳で味わう「盆土産」



八戸ブックセンター  
HACHINOHE BOOK CENTER

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F  
TEL 0178-20-8368 FAX 0178-20-8218 web <https://8book.jp/>